

1 派遣期日 令和5年 11月 10日(金) ～ 11月 10日(金)

2 派遣先 宇都宮市立若松原中学校
所在地 栃木県宇都宮市若松原3丁目19-27
<http://www.ueis.ed.jp/school/wakamatsuhara-j/>

3 研修内容

- ・第47回 関東甲信地区中学校英語教育研究協議会栃木大会(第1分科会)
- ・『見方・考え方』を働かせた「聞くこと」、「話すこと(やりとり)」の言語活動の充実をテーマとした small talk を活かしたペアでの英会話活動を中心とした授業
- ・発表者 宇都宮市立若松原中学校 教諭 永田 夏子
- ・指導助言 鹿沼市教育委員会 学校教育課
学校教育担当副主幹・指導主事 大門 千恵子

(1) 研究の概要

分科会の研究主題を以下のように設定し、主にコミュニケーション活動の充実を目指した研究を行った。

研究テーマ：『見方・考え方』を働かせた「聞くこと」「話すこと(やり取り)」の言語活動の充実

目指す生徒の姿としては、コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、「見方・考え方」を働かせ、社会的な話題について、聞いたり読んだりして得られた事実や情報についての自分の考えを他者に配慮しながら表現したり伝え合ったりできる生徒と定義づけていた。他者への配慮とは、相手の理解度や習熟度に応じて表現を工夫したり、ジェスチャー等で補ったりすることを想定している。会話のテーマは主に、日常的な話題や社会的な話題であり、それぞれについて、SDGsの視点を絡めることを目指している。また、やり取りを行う上で、帯活動の継続や1人1台端末及び「Small Talk ノート」を活用して生徒自身の気づきを取り上げ、全体で共有し表現の幅を広げる工夫を行っていた。

(2) 授業の展開から

① small talk ノートとマッピングシートの活用

ウォームアップとして行われる small talk のヒントとなるよう、前時までに作成したマッピングシート(図1)を使用していた。ただし実際のやり取りでは、そのシートよりも、「small talk ノート」という英語表現のメモを活用することが多く、メモの通りの質問のみが多用された。

中学1年生という学習段階から考えると、マッピングシートだけで即興の英語のやり取りをするのは難しいため、「small talk ノート」は必要な支援だと考える。マッピングシートは、用意した内容をスピーチで伝えるような活動で使用するなどの使い分けが有効だと感じた。

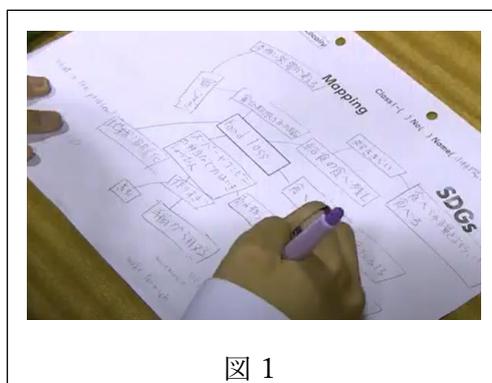


図1

② テーマに即した英会話活動

前時までで行っていたテーマ（フードロス）についての調べ学習をもとにペアでの英会話を行っていた。その後、代表ペアによる発表が行われた。全体での発表は、グッドモデルとしては有効だが、クラス全体の活動時間は減少するため、取り扱いが難しい。代表生徒は挙手によって選ばれていた。協議会でも、代表者の発表を行う回数や長さ等について活発に協議された。生徒がエラーを気にすることなく安心して活動に取り組めるような工夫が必要である。



図 2

③ 中間指導

ペア活動は、パートナーを替えながら合計 3 回行われたが、それぞれの間に中間指導が設けられていた。中間指導を通して、実際の活動の中で感じた困り感や気になった表現方法を全体で共有し、より適切な表現を学習することができるため、効果的だった。こうした指導においては ALT と JTE の即興的なやり取りが必要になるため、JTE 側の英会話能力や、ALT との関係性も、中間指導を充実させるために重要な要素だと再確認できた。

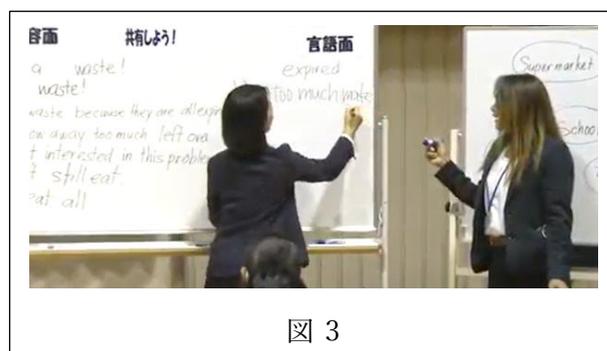


図 3

④ やり取りに必然性を持たせる工夫

発表校で実際に調理を担当している調理師のインタビュー映像を流していた。テーマであるフードロスについて、給食の残食量と絡めて考えることで問題を身近なものとして捉え、自分たちの立場からできることは何かという視点で考える機会となっていた。

授業内での ICT の活用により、級友の意見や情報をテンポ良く共有できる活動が増えているので、身近な人へのインタビューや級友の考えの紹介等の、生きた英語力の育成につながる手法であると感じた。



図 4

4 感想

英語授業で行われる話す活動の中でも、スピーチやプレゼンテーションではなく即興でやり取りをする活動は、令和 3 年度中学校学習指導要領で新たに目標設定されている。しかし、中学 1 年生という習熟段階にあって、必然性を伴わせつつ即興でのやり取りをすることは難しい。テーマも、社会的なものを取り入れるという研究主題に沿い、SDGs の視点を意識して構成するなど難易度が高いと感じた。活動の際には、条件を限定し、短い時間でのやり取りを繰り返しながら、帯活動などで複数時間にわたって少しずつ表現を増やすなどの工夫が必要である。

今後の自分自身の授業づくりにおいても、生徒が既習事項を活用しつつ意欲的に取り組めるような授業展開の工夫に努めていきたい。